

第2学年 道徳科学習指導案

日時 令和2年10月14日(水)
13時30分～14時15分

1. 主題名 思いやりの心で B-(6) 親切、思いやり
2. 教材名 ぐみの木と 小鳥 (出典: 学研「みんなのどうとく 2年」)
3. ねらい 親切な行動をとった小鳥と、その行動に感謝するりすの役割演技を通して、親切にすることの気持ちよさに気づき、進んで親切にしようとする心情を育てる。

4. 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値について

本主題は、「主として人との関わりに関すること」の「身近にいる人に温かい心で接し、親切にすること」に関わる内容である。これは中学年「相手のことを思いやり進んで親切にすること」、高学年「誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にすること」と深く関わっていく。さらに、中学校「思いやりをもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること」へと発展していく内容である。

自分のことばかりを考えたり、自分の思いだけを主張したりしては、他者と望ましい人間関係を築くことはできない。お互いを思いやる気持ちが不可欠である。思いやりとは、相手の気持ちや立場を推し量り理解できるということである。この思いやりに根ざした行為が親切である。具体的には、その人の気持ちや立場になって考え、励ましや手助けなどをするのである。そして、思いやりを持ち、親切にすることによって、相手も自分も温かい気持ちになり、人間関係を和やかなものにしていくと気付かせていくことが大切である。

第1学年及び第2学年の児童においては、幼児期の自己中心的な世界から、しだいに視野を広げ、身近にいる人々に広く目を向け、相手のことを考えながら行動できるようになる反面、自分の好きな友達や優しくしてくれた友達にだけ親切にし、好き嫌いや関わりの多い少ないによって、思いやりの気持ちをもつことや親切な行為に偏りが見られることもある。

そこで、指導に当たっては、児童が温かい心をもって人に接し、進んで親切にすることの大切さについての考えを深め、その関わりを自分の喜びとして感じられるようにし、具体的に親切な行為をしようとする心情を育てることが大切である。

(2) ねらいに関わる児童の実態について

児童は、家族だけではなく家の周りの人や学校の人々、友達などとの関わりが次第に増えてくるなかで、自分中心の考え方を多くするものの、様々な人々との関わりの中から、相手の考えや気持ちに気付くことができるようになってきている。休み時間や当番活動などの場面で、困っている友達に対して優しく声をかけたり、助言したりする姿がたくさん見られるようになった。休み時間、一人で過ごしている友達に対して、「何しているの?」「一緒に遊ぼう」と声をかけたり、清掃活動で自分の分担当場所が終わると、他の班に「手伝えることある?」と聞きに言ったりする場面も見られた。

道徳科の学習では、1年時の学習、教材名「はしの上のおおかみ」(内容項目B-(6) 親切、思いやり)で、くまやおおかみの心情を役割演技し、親切にしたときの気持ちよさや、誰に対しても思いやりの心を持って接することの大切さについて考える授業を経験している。

日常生活における「親切、思いやり」に関わる指導としては、当番活動で、友達と関わる機会を意図的に設定し、相手を思いやる気持ちを育ててきた。その結果、休みの児童の当番を代わりにやっ
てあげたり、大変な仕事をお互いに助け合いながら行ったりといった姿が見られるようになってきてい
る。そういった姿を様々な場面で紹介し、相手のことを思いやっ
て行ったことを認め称賛することで、望ましい他者との関わり方を示し、指導を続けている。

さらに、新1年生が入学し、「先輩」としての自覚が芽生え、生活科では、新1年生に学校やおすす
めの教室の紹介文を書いたり、下校の時に1、2年生で班を作って一緒に下校をしたりするなど、自
分よりも幼い人への思いやりや優しい行動についても学んできたところである。

しかし、まだ相手のことを考えずに意地悪を言ったり、自分の都合で困っている友だちがいても、
見て見ぬふりをしてしまったりすることもある。

役割演技・動作化については、1年生の時から何度か経験し、自分の考えを表出したり友達の考え
に触れたりすることの面白さを味わう姿が見られてきた。そのため、楽しんで行う児童が多く、積極
的に活動に参加できる雰囲気がある。

本時では、困っている人を思いやり、進んで親切にするためには、自分のことだけを考えるのでは
なく、相手の気持ちや立場になって考えることが重要であることに気付かせたい。また、りすのこ
を思っ
てぐみの実を届けた小鳥と、大変な思いをしながらも届けにきてくれた小鳥に対するりすの役
割演技を通して、お互いに温かい気持ちになることに気付かせ、具体的な親切な行為に繋げていき
たい。

(3) 教材について

久しく姿を見せないりすを心配しているぐみの木の話聞き、小鳥が代わりにりすの様子を見に行
くと、りすは病気で寝ていた。病気のりすのためにぐみの実を運ぶ小鳥だったが、嵐が行く手を阻む。
行こうか行かまいか悩む小鳥だが、やがてぐみの実をくわえて嵐の中をりすのもとに飛んでいく。そ
んな小鳥にりすが感謝の言葉を述べるという話である。

本学級の児童の実態を受け、主に次の場面を中心に考え、話し合うこととする。

① 「りす」を心配する「ぐみの木」の気持ちに寄り添い、病気の「りす」のためにお見舞いに行く場
面。

ぐみの木のかわりに見舞いに行き、病気のりすのことを思いやる小鳥の気持ちに共感させたい。

② やみそうもない嵐の中、小鳥がりすのところへ行くかを迷う場面

りすを思いやる気持ちと、嵐で自分がひどい目に遭うかもしれないという気持ちの中で行くこと
を決めた小鳥の気持ちに共感させたい。また、葛藤する気持ちの中には、様々な考え方があるとい
うこと、そして本当はりすのところに行く方がいいことが分かっているものの実行に移すことが躊躇
われる気持ちがあることにも気付かせたい。

③ 小鳥がりすのところへつき、「こんなあらしの中をありがとう。」と言われた場面。

相手を思いやり、親切にしたことで感謝された小鳥の心に沸いた温かな気持ちに共感させたい。

役割演技を通して、葛藤しながらもりすのことを思っ
て行くことを決めた小鳥と、大変な中来てく
れた小鳥に心から感謝するりすの対話やその時の気持ちを考え、親切にした方もされた方も温かい
気持ちになることに気付かせたい。

5. 本校の研究と関わって

【研究主題】

自ら学び、共に学び合う心豊かな児童の育成

—自ら考え、自他との対話の中で考えを深める道徳科の授業の工夫を通して—

① 発問に対する考え方

自分のことだけではなく、相手のことを考えて行うことが親切であることに気付かせるため、中心発問を投げかける前に、りすの所に行くか行かないか葛藤する小鳥の気持ちを考えさせることにした。行くことが良いことであると分かっているものの、怖い思いや不安な思いもあることに共感させ、小鳥が行くか行かないか葛藤する思いがあったことに気付かせるために、補助発問の準備をし、児童に揺さぶりをかけたい。葛藤をした上で、小鳥はりすの所に行くことを決めたことを考えさせることで、中心発問で、りすに「ありがとう」と改めて言われた時に、相手のことを思っていた親切の充足感を感じ、相手のことを思っている行為こそが親切であることに気付かせたいと考えた。

② その他の工夫

・導入の工夫

国語「うれしいことば」の学習で児童が書いた文を紹介することで、親切にした時やされた時の気持ちを思い出させ、本時で考えたい「親切」についてのイメージをもたせる工夫をする。

・表現活動の工夫

小鳥がりすのところへ行く場面では、役に入ることで更に深く考え、自分事として捉えることができるよう、役割演技を取り入れる。また、自分の思いをもって役割演技に臨めるよう、自分の考えをワークシートに記述してから臨ませる。

・ユニバーサルデザインの考えに則った板書や教具の工夫

どの児童にも本時のねらいや考えの手立てを視覚で捉え、学習の内容を見通して取り組むことができるように、板書や、教具を工夫する。板書では、場面絵を用いて考えの手助けをしていく。背景の色を①の場面では水色（穏やか）、②の場面では赤紫（葛藤・不安）、③の場面ではピンク（温か）にすることで、視覚的にも小鳥の心情がわかりやすい工夫をする。また、資料の語り聞かせの場面では、大型テレビに場面絵を写したり、嵐の情景がイメージしやすいように音を流したりして、小鳥の葛藤がよりリアルにイメージしやすいような工夫をする。

6. 指導計画

事前指導

- ・国語「うれしいことば」の学習で、友達や周りの人に言われて嬉しかった言葉を選び、出来事やその時の気持ちを書く。
- ・帰りの会で「今日のスター」の発表。友達にしてもらって嬉しかったことや友達が頑張っていたことを発表する。

道徳科

- 教材名「ぐみの木と小鳥」
 - ・自分のことだけを考えるのではなく、困っている人を思いやり、相手のことを考えて、進んで親切にしようとする心情を育てる。
- 次教材「まいごのすず」
 - ・相手のことを考えて、親切な行為をすることの大切さがわかり、相手のことを考えて親切な行為をしていこうとする態度を養う。

事後指導

- ・「しんせつの木」の取り組み。友達にしてもらって嬉しかったことを掲示していく。
- ・帰りの会で「今日のスター」の発表の継続。友達にしてもらって嬉しかったことや友達が頑張っていたことを発表する。

家庭・地域との連携

- ・自分たちの成長を支えてくれた人に感謝の気持ちを持ち、その気持ちを手紙にして伝える。

7. 学習指導過程

過程	学習活動と主な発問	予想される児童の発言	指導上の留意点
導入	<p>1. 本時の学習の方向性を知る。</p> <p>○「うれしいことば」を言われた時、どう思いましたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・優しいなと思った。 ・嬉しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの持つ「親切」のイメージが明らかになるよう、日常の場面で親切にされたことを思い出させるようにする。 ・国語の学習「うれしいことば」の中からいくつか紹介し、本時の道徳的価値について問題意識をもてるようにする。
展開	<p>2. 教材「ぐみの木と小鳥」を聞き、小鳥の心の葛藤について考える。</p> <p>㊦ぐみの木にりすのことを聞いた小鳥はどんなことを思ったでしょう。</p> <p>㊦りすに「ありがとう。」といわれた小鳥はどんなことを思ったでしょう。</p> <p>㊦嵐の中、小鳥はどんなことを考えていたでしょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・りすが心配だな。 ・動けないぐみの木のかわりに自分が行ってあげよう。 ・「ありがとう。」って言ってもらって嬉しい。 ・また明日も来よう。 <p>行く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・りすが心配だから頑張っていく。 ・自分が行けばりすは喜んでくれる。 <p>行かない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・嵐が激しいのに出かけることはできない。 ・雨の中でかけるのは怖い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・誰にでも内容がわかるように、登場人物とあらすじを先に伝えてから教材を読み聞かせる。 ・嵐の場面では嵐の音を流して雨風の激しさを実感できるようにする。 ・嵐の場面の小鳥の気持ちを考えやすくするために、小鳥は親切な気持ちを持って行動にうつしたことを確認する。 ・りすの「ありがとう。」の言葉で小鳥の気持ちが穏やかなものになったことを場面絵の背景の色(水色)で表す。 ・小鳥が行く、行かないで葛藤している気持ちがわかるように場面絵の背景の色(紫)で表す。 ・葛藤する小鳥の気持ちに共感できるよう、なぜそう考えていると思ったのか根拠を明らかにさせる。 ㊦ぐみの木に「嵐がやんでからにしてください」と言われたんだね。 ㊦こんな嵐の中、こわくないかな。 ㊦こわい思いをしてどうして行こうと思うのかな。 ㊦行ったら小鳥はけがをしてしまうかもしれないね。 ㊦自分のことは考えなかったのかな。 ㊦嵐の中で体調の悪いりすはどんな気持ちかな。 ㊦小鳥は誰のことを考えているのか

	<p>3. 役割演技をして、りすに感謝された小鳥の気持ちを考える。</p> <p>㊦りすに「こんなあらしの中をありがとう。もうすぐ元気になります。」と言われた小鳥はどんなことを思ったでしょうか。</p>	<p>小鳥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ どういたしまして。「ありがとう」って言うのもらってうれしいな。 ・ 嵐の中、頑張ってやってきて本当によかった。 ・ 来るのは大変だったけれど、「ありがとう。」と言ってもらえるのは気持ちがいい。 ・ りすさんが元気になってくれてうれしいよ。 <p>りす</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大変な中来てくれて、本当にありがとう。 ・ 小鳥さんはとても優しいな。 	<p>な。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ りすに感謝された時の小鳥の気持ちを、ワークシートに記入させ、自分の思いをもって役割演技に臨めるようにする。 ・ 嵐の中ぐみの実を届けにきた小鳥と、感謝するりすに分かれて役割演技をすることで、小鳥の気持ちを言葉で表現できるようにする。 ・ より具体的に考えられるように、役割演技の際には、嵐の音を流す。 ・ 小鳥の気持ちだけでなく、りすの気持ちも聞くことで多面的・多角的に考えられるようにする。 ・ 場面絵の背景を温かみのあるピンクにすることで、視覚的にも、親切にした後の小鳥の嬉しい気持ちや温かい気持ちがわかるようにする。 <p>㊦嵐の中で行くのは大変だったのに、どうして「よかった」と思ったのかな。</p> <p>㊦最初に言われた「ありがとう」と、今の「ありがとう」どっちの方がうれしいかな。それはなんでかな。</p> <p>㊦りすさんが喜んでくれたのがうれしいんだね。</p> <p>㊦りすは小鳥が来てくれてどう思ったかな。</p> <p>㊦「ありがとう」の他に、どんなことを言っていたのかな。</p>
<p>終末</p>	<p>4. 学習を振り返る。</p> <p>○親切にすると、どんな気持ちになるのかな。</p> <p>○今日の授業でわかったことや感じたことを書きましよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相手も自分も嬉しい気持ちになる。 ・ やってよかった。 ・ 相手のことを考えて行動してよかった。 	<p>㊦小鳥はどんな思いでりすに親切にしてあげたかな。</p> <p>㊦よい気持ちになったのは誰かな。</p> <p>・ 学習の積み重ねがわかるように、ねらいとする道徳的価値について学んだことを記入させる。</p>

8. 評価の視点

- ・ 親切にすることの大切さを、親切にするほう、されたほう様々な立場から考えているか。(発言、役割演技)
- ・ 親切にすることのよさを、自分の生活を見つめ、振り返りながら考えているか。(ワークシート)

だい 回 ぐみの木と小鳥

しんせつにするとどんな気もちになるか考えよう。

挿絵

- ・りすさんがしんぱい。
- ・ぐみの木のかわりに行こう。

挿絵

- ・りすさんがよろこんでくれてうれしいな。
- ・あしたもこよう。

ありがとう

挿絵

あらしの中、小鳥はどんなことを考えていたのかな？

行く

- ・りすさんがしんぱいだから行こう。
- ・やくそくしたから行かないと。
- ・行けばまたりすさんがよろこんでくれる。

行かない

- ・行きたい気持ちはあるけどけがしたらあらしがやんでも行けない。
- ・あらしがはげしいから行けない。
- ・こわい。

りすに「ありがとう」と言われたとき、小鳥はどんなことを思ったのでしょうか。

- ・がんばってきてよかった。
- ・りすさんがよろこんでくれてうれしい。
- ・こわかったけどきてよかった。

挿絵

こんなあらしの中をありがとうございます。もうすぐ元気になります。

- ・小鳥さんとてもやさしいな。
- ・大へんな中きてくれて本当にありがとう。

しんせつにすると...

- ・じ分もあい手もうれしい気もちになる。
- ・やっつてよかったと思う。

ぐみの木と小鳥

二年組 番

名前

りすに「ありがとう」と言われたとき、小鳥はどんなことを思ったのでしょうか。



こんなあらしの中をありがとう。
もうすぐ元気になります。

かんそう

Blank rounded rectangular box for writing.

10 成果と課題

(1) 発問について

- ・ 中心発問は、ねらいにせまるものとなっていたか。
- ・ 基本発問は、中心発問を考えさせるために効果的であったか。
- ・ 教師の投げかけた補助発問は、児童の思考を深めたり、違う視点で考えたりするのに効果的であったか。

【成果】

- 基本発問は精選され、児童の意見が想定されていた。
- 基本発問により、「行く」か「行かない」かの葛藤場面まで、登場人物の気持ちや場の状況を捉えやすくしていた。
- 中心発問からの役割演技の流れがよかった。

【課題】

- 行く、行かないを分けて聞いてみたらよかったのではないか。
- 行かないをもっと聞いてみてもよかった。
- 役割演技の後補助発問で「2人のよかったところはどこかな。」は適切だったのか。
- 切り返し、問い返し、補助発問により、児童の気持ちをさらに引き出したい。

<改善策>

- ・ 基本発問では、事前に児童の意見を想定して、それに対する準備をしたことで、中心発問へつなげていく役割を果たすことができた。
- ・ 中心発問で、役割演技を取り入れたことで、小鳥とりすの双方の思いに触れさせることができねらいである親切にすることの気持ちよさに近づけることができた。しかし、演技の取り上げ方やほかに児童への問いかけについては、さらに工夫していくが必要になる。演技をただ見るのではなく、「どうだったか。」と問いかけ、さらに、「どうしてそう思ったのか。」切り返していくような補助発問をすることで児童の思考を深めていくことができる。

(2) 伊勢スタイルから工夫した点について

- ・ 導入の工夫について
- ・ 表現活動の工夫（役割演技）について
- ・ ユニバーサルデザインに則った板書や教具の工夫について

【成果】

- 導入で児童が以前に書いた「うれしい言葉、いいなあと思った言葉」を紹介し、教材につなげる形で自分たちの生活で感じた思いを取り上げたことで、児童は教材に入り込みやすかった。
- 中心発問から役割演技の流れがよかった。
- ICT で背景色を場面に合わせて設定したことで、その場面の持つ意味を伝えることができていた。
- ICT を活用し、場面絵を提示したことで、児童が教材を理解するのに役立てることができた。

【課題】

- 中心発問の役割演技は効果的だったのか。
- 書いたことを表出させる方法の難しさを感じる。書いたものをいうのか、書かずに言うのかどちらが良いのだろうか。

<改善策>

- ・役割演技を取り入れたことで、児童は、自分なりに考えて登場人物の気持ちを表現しようとする積極性を見せていた。また、見ている児童も、演技している児童の思いをしっかり受け止めていた。一方で書いたものを演技で言えなかったり、その場で違う言葉になったりして戸惑う様子も見られたので、WSを書かないで演技してみることも可能である。学級の実態を見極めどのように取り入れるか、十分検討することが大切である。

【指導助言】

- ・今回の授業は、ねらいに迫るものになっていた。日頃の学級経営が整っていることで、授業の土台ができていた。
- ・日常生活の中に道徳教育が意識されている。
- ・発問が精選されており、児童の反応が想定されていた。
- ・嵐の効果音が、児童を教材の世界に引き寄せていた。
- ・役割演技・動作化は、それを取り入れることで、児童に何を考えさせたいのか、何を気付かせたいのかを始めに考えたい。それにより設定が変わる。
 - 例 親切にすることの気持ちよさ→りすのセリフ「こんな嵐の中をありがとう」からはじめる。
 - 葛藤や難しさ→嵐の場面からはじめる
- ・本学級の児童の実態から考えると、ワークシートなしの方が、即興的にできたかもしれない。反応が大体想定できる場合は、書かせないで役割演技をさせてもよい。
- ・役割演技をした児童に感想を聞くやり方もある。
- ・役割演技を見ていた児童に感想を聞き、どこがよかったのか、どうしてそう思ったのかを問い返していく。聞いていくと道徳的価値が高まる。
- ・問い返しをすることで聞き方が身についていく。
- ・発言を広げるための補助発問や問い返しを準備しておくとうよい。
- ・教材・解説をどう読み解くか、教材を吟味していくことが大切となる。
- ・今後、内容項目の順序、関連性に気をつけて授業を組み立てるとよい。
- ・終末については、導入に戻していく形も考えられる。

- ・学級経営が行き届いていて、学習規律が身についていた。
- ・つぶやきや個が大切にされていた授業だった。
- ・今回の教材では、小鳥とリスはそれまでの関係性はなく、全くの他人ともいえる。その関係性をはっきりさせた上で、リスのために小鳥のとった行動を考えさせると、考え方が深まる。
- ・役割演技を実施する際に気をつけたいことは、次の通り。
 - ①演技前に心を静めさせる。
 - ②教師の手本を見せる。
 - ③ペアで練習させておく。
 - ④WSの記述にこだわらない。
 - ⑤役の交換をしてみる。
 - ⑥教師が相手役をしてみる。
 - ⑦実演後に感想を聞く。
 - ⑧冷やかさない。